



西中千人「呼継」
2013年 高16.0×42.0×40.5cm

●西中千人 にしなか ゆきと
1964年和歌山県生まれ。88年星薬科大学薬学部卒。渡米し、カリフォルニア芸大で彫刻とガラスアートを学ぶ。海外のアートフェア（NY、ロンドンなど）や日本国内の画廊で個展開催。国内のみならずスペイン、北欧の美術館・大学に作品収蔵。受賞多数。

*展覧会インフォメーション 「西中千人ガラス展」 7月3日(水)～9日(火) 米子高島屋4階美術サロン

林屋晴三の

眼

のであった。したがってかつての修理を目的とした呼継の呼称を、まったく異なった造形表現に当てたといえる。

しかし私のように古陶にながく親しんできた者の認識では、彼が創案したガラスの器にはいささかなじまないように思えて気になるのであるが、西中呼継ガラスが脚光をうけて普遍してゆくと、呼継という言葉は本来の語意から離れて、新しいガラス作品の用語となるかもしれない。

ともあれ彼が創案した呼継ガラスの器が美しければ、それは新しいガラス芸術として注目されるであらうし、限りなく自由な表現が可能であるから、いまのところ異端なガラス器と見る人もあらうが、今後大いに普及してゆくにちがいない。そして、西中さんは、ここにお見せしている美しい器を私に提示した。酸化銅によって呈色したトルコブルーのガラスと、セレンによるオレンジ色のガラスに金粉を混入させて、おおらかで、あたたか味のある夢見るような器を造った。そしてこの後より繊細な技術を駆使することによって、ますます魅力を深めてゆくと思うのである。

西中さんは、名を千人と書いて「ゆきと」と読ませ、一九六四年に和歌山で生まれた。星薬科大学の薬学部卒業後アメリカに渡り、カリフォルニア芸術大学で彫刻とガラスアートを学ぶという、いささか毛色の変わった経歴をもつガラスアーティストである。日本橋の高島屋で例年個展を催してきたが、私は八年ほど前に彼の作品と出会い、青ガラスの力強い小さな壺を購め、茶入れとして用いたりして共感を抱いていた。

その彼が近年、「呼継」と名付けた技でガラスの器を制作して脚光を浴びている。

彼の呼継という作品はガラスの造形としては独創といっているが、その本来の語意は、江戸時代以来やきものの修復に使われていた技の呼称で、破損した器の一部が欠失したため、それを補うべく他のやきものの破片をあてて漆継いするもので、破片を呼び寄せるということから俗に呼継と言ったのであった。

西中さんはその呼継の技法にヒントを得て大胆に異なった色彩のガラスを継ぎ合わせて一つの器を造ることを考え、ガラスの器の造形とデザインに新生面を創出した

第51回

西中千人「呼継」

はやしや・せいぞう

1928年京都府生まれ。48年より国立博物館員(現東京国立博物館)、90年同博物館退官。2013年5月まで菊池寛実記念智美術館館長。現在、東京国立博物館名誉館員、額川美術館理事長、樂美術館理事、東洋陶磁学会常任委員、五島美術館、高山記念館、三井記念美術館等の評議員も務める。